

<エッセイ>

金融情報に関する英日翻訳について

西田万里子

(同志社大学・関西学院大学非常勤講師)

時代劇の英語字幕付き映画を見ていて、殿様が発する「近う寄れ」というせりふが英語字幕で「Come near」と訳されているのを見た時には何やら物足りない感じがしたものだ。このせりふは、身分の高い人が低い人に対して発せられた言葉であり、しかも、現代語で使うことのない言葉でもあることが日本人ならわかるからだ。もちろん、映像翻訳という時間的制約の大きい翻訳である上、殿様と家来の関係はスクリーン上に映し出されており、メッセージそのものは伝えられているのだから、「Come near」は非常に適切な訳だということは承知している。ここで私が強く感じたのは、言葉には辞書で定義された意味以上に、もっと多くの情報が込められている一方で、翻訳ではすべてを訳語に反映するわけにはいかないということである。

文字だけで表現された文書の翻訳において、書かれた言葉に盛られた情報量のすべてを翻訳者が読み取っていないことも多い。ましてや、別の言語に表現するとき、伝えられる情報量はさらに減ることだろう。筆者は、翻訳とはこういうものという前提さえ知らずに、受験英語の延長線上で英文和訳を続けていたが、ある時「翻訳研究への招待」と出会い、大いに得るものがあり、翻訳研究に触れることは大変意義があると痛感した。

翻訳の場合、単語が印刷されて目の前にあるため、どうしてもすべての単語を訳さなくてはというプレッシャーを感じがちである。しかし、1語1語をまさに1対1で訳すなど無意味であり、結局内容が何も伝わらない意味不明の訳文が出来上がることになる。英文の内容を日本語で要約するという行為について考えてみよう。要約においては、内容を伝えることが大切であり、そのためには必要な追加や削除を行い、逐語的に訳す必要はない。内容の読み取りと読み取った内容の表現に集中できる。この態度を、全文訳の時にも生かすようにしてみると、非常に翻訳しやすくなった。

しかしながら、不要なものは削り、あるいは必要なことは追加し、必要な説明を追加するためには、結局のところ内容を理解することが大切だということになる。この点が、表面の構造に頼った訳にならざるを得ない機械翻訳と人間の翻訳の違いかもしれない。

さて、今回は金融分野における英日翻訳というテーマに絞って、翻訳理論で取り上げられる話題の中から実際例を取り出して考察してみたい。具体的に言うと、ウォールストリート・ジャーナル紙の姉妹雑誌の「Barron's」のコラム欄「Up and Down Wall Street」を3年以上にわたり毎週担当して要約原稿を書いた経験を基に、さまざまな例を挙げて考察する。

1. 言葉遊び

英語の経済関係の雑誌記事には言葉遊びが多いことに驚かされる。今回取り上げた *Barron's* 誌だけでなく、英国のエコノミスト誌 (*Economist*) にも、相当多くのだじゃれが組み込まれている。この点については、また新たに寄稿したい。

以下に *Barron's* 誌のコラムに登場した言葉遊びの例と、その処理について紹介する。

1.1 音の類似を使った言葉遊び

起点言語 (SL) の音の類似を使った言葉遊びを翻訳するのは難しいと言われている。というのも、SL 側で音が類似していても、目標言語 (TL) の側に類似した組み合わせが見つからないからだ。

例えば、2010年1月25日号のタイトル「New Dismal」という言葉は、金融危機後の経済を指して、米国の債券運用会社ピムコ (PIMCO) の最高経営責任者であるモハメド・エリアン (Mohamed El-Erian) 氏が提唱したとされる有名なニューノーマル (新しい標準) という言葉の音の類似を利用して、「ノーマルというよりはディズマル (憂鬱) だ」、と言いたいわけだが、これをいちいち説明すると長くなるので、「新しい憂鬱」程度の訳にせざるを得ない。音の類似による言葉遊びを TL に移行するのは難しいが、雑誌記事には数多く使用されている。

頭韻、脚韻なども音の類似に含めてもよいかもしれない。頭韻、脚韻も、TL に同様の組み合わせがないので訳出が困難である。例えば、2010年2月1日号で「hope, hype and heat と cool, calm, and collected」という表現が見られる。h と c で始める言葉を集めて、対極的な心的態度を表現しようとしたようだが、音の類似性は割愛して意味しか翻訳できない。

1.2 Double-meaning を利用したもの

Bear: ウォール街では、bear (=熊) は弱気派 (株価などが下がると予想すること) を指す。2009 年中株価は上昇の一途で、弱気派が見当たらなくなってきた頃のこと、リゾート地で本物の熊 (bear) がごみをあさって困るというニュースが出た。「なるほど、熊がウォール街にいないと思ったらリゾートに出かけていたのか」などと言葉で遊ぶ (2009年9月7日号)。これを日本語にして笑わせようとするなら説明が必要になる。

この bear の例は、度々登場する。ちなみに、2月8日号のタイトルは「Out of Hibernation」であったが、これも、「冬眠する熊がそろそろお目覚めか」ということで、下げ相場を暗示するタイトルとなっている。

次の例は、オバマ大統領が12月3日に雇用サミットを終え、12月4日に経済界で毎月大きなニュースとなる雇用統計が発表されたという背景で書かれたものだ。この文は、モーゼが石板をたずさえて山から降りてきた場面を彷彿とさせる。また、「光あれ」という有名な言葉も連想させる。この summit という単語は、いわゆる首脳会議を意味する「サミット」と山上とをかけてあるようだが、そこまで日本語で盛り込むのは難しい。また、雇用サミット、雇用統計という米経済界の出来事に注意を払っていないとそもそも心に引っかかることもないかもしれない。

Obama came down from the summit carrying a tablet, and said, "Let there be jobs." And, lo and behold, there were jobs. (Dec.7, 2009).

1.3 有名なフレーズのもじり

有名なフレーズのもじりは数多い。例えば、2009年11月23日号では、有名な、「来た、見た、勝った」のもじりが使用されている。

He came, he saw, he conked out. That, it grieves us to report, is a sad but accurate summing-up of Barack Obama's grand swing through Asia. (Nov. 23, 2009)

この文例は、オバマ大統領アジア歴訪を皮肉ったもの。あまりの腰の低さを非難気味に語っているように思われる。勝った=conquerと音の近いconked outを使用したと思われるが、日本語でそこまで一致する単語を探すのは難しい。「来た、見た、疲れた」ではさびしいが仕方ない。音の類似だけならば、「来た、見た、帰った」の方が近いかもしれない。

1.4 動詞と名詞の組み合わせで遊ぶ

動詞プラス名詞の組み合わせで、動詞を同じにして名詞を変えて遊ぶという例も多い。次の例は、オバマ大統領のアジア歴訪での成果は何もないではないか、というくだりなので、何か「頂いてきたもの」というイメージのわく表現を日本語で探してみたところ、「大目玉を頂戴する」というのが浮かんだ。「同盟国から有り余るほどのお辞儀や愛想笑いを、中国のお偉方からは米国の浪費癖や累積債務について大目玉を頂戴した以外には何も持たずに帰ってきた」というのはどうか。・・・日本語で遊んでみた。

Apart from eliciting a bumper crop of bows and synthetic smiles from the former, he came away with nothing but stern lectures from the Chinese mucky-mucks on America's awesome spending and compulsive borrowing. (Nov. 23, 2009)

2010年2月8日号では、大手銀行幹部のボーナスの問題を取り上げ、oweという動詞に、interestとgratitudeとをからませ、「...we collectively owe the maligned bankers our gratitude as well as any unseemly fees they may have levied on our unpaid balances.」という一文が見られる。日本語の場合、「利息を払う」とは言うが、「感謝を払う」とは言わないため多少日本語をずらしてみても、「銀行側はわれわれに対し、法外に高い遅延利息だけでなく、敬意も払えというわけか」としてみるのはどうか。同じ動詞に引っ掛けた表現の感じは出るかもしれない。

2. 専門用語理解の必要性

次に、英語の語法の問題から離れて、金融専門用語の問題を論じてみたいと思う。というのも、日本経済新聞2009年10月28日号の「大機小機」というコラム欄に「英語の情報開示文書で苦勞する日本を横目に、シンガポールの資本市場は利便性で評価が高い」という一文があり、非常に強い印象を覚えたからだ。それ以来、金融を得意分野にすれば、翻訳者として日本経済に貢献できる場が多いのではないかと感じている。真に公共的精神を持って金融情報を読み解き、平易な日本語で解説できれば、

日本の経済界に大いに貢献できるのではないだろうか。金融関係の翻訳では、要するに書かれた内容に関する解説者であることを求められていると思われる。生半可な知識で誤訳すると、周りに及ぼす影響が大きいのである。

金融翻訳の修辭的な問題としては、メタファーなのか、あるいは慣用化しているのか分かりにくいものも多い。例えば *dividend* (配当) など、本当に配当を支払うという意味で使用されている場合もあるが、利益をもたらすという一般的意味で使用されていることもある。判断に苦しむが、こういう場合は結局事実関係を調べるしかない。

英文理解の問題ではなく、TL 側の日本語の用語の選択の問題も非常に大きい。つまり、英語の段階で内容を正確に読み取ったとしても、日本語の書き方次第で、読者の受け取り方が翻訳者の意図したものとは違うものになる可能性がある。

この点に関わる要因として、日本と海外との制度上の違いがある。日本にはない制度、日本にしかない制度など、単純に訳語を充てるわけにはいかない場合も多い。*mortgage* は一般的に住宅ローンと訳されるが、例えば商業用不動産向けの融資にも *mortgage* が使用される。この場合は不動産担保融資とでも訳すしかない。とにかく 1 対 1 対応で単純に処理すると非常に危険である。さらに、法律に詳しい人から見れば、米国におけるモーゲージローンと日本の住宅ローンは同じとはいえない。一応、ニュースなどでは *mortgage* は住宅ローンと訳さないと、一般の視聴者にわかりにくいという事情はある。

次に、金融と会計は切っても切れないものがある。例えば、有価証券という言葉と投資有価証券という言葉が指すものは同じなのか違うのか。それを解明するためには、会計を詳しく知る必要がある。会計の世界では、短期売買を目的とするものが有価証券、ある程度の長期保有を目的としていれば投資有価証券という勘定科目で表示することになっている。「有価証券」も「投資」もともに日常語といえるほどに良く知られた言葉であるが、会計学上では明確な定義で使い分けられている。しかも、さまざまな金融商品のうち、何が有価証券で、何が投資有価証券かという、その金融商品の名前だけで分類が決まるのではなく、保有期間あるいは目的によって分類が変わることになっている。すなわち、同じ 1 つの名前を持つ物が会計処理上ではさまざまに名前を変えていく。そのあたりの事情を知らずに訳語を選択すると翻訳者の意図とは違った意味に受け取られる可能性がある。従って、経済関係の記事を訳す場合、会計用語の知識がなく、学習用英和辞書の訳語が頼りという状態では信頼できる翻訳を仕上げるのは極めて困難だろう。

以上、自分自身の経験を基に考察してみた。金融翻訳は、英語のレトリックの理解と経済・金融の知識が要求されるため、挑戦しがたいのある分野である。金融用語を知っていても、レトリックが理解できないとメッセージを読み落とす。レトリックばかりに凝っても、経済や会計の知識がないと内容が理解できない。今後の目標としては、同様の考察をエコノミスト誌の記事を利用して行うこともやってみたい。

.....
【著者紹介】西田万里子 (NISHIDA Mariko) 大学非常勤講師兼フリーランス翻訳。神戸大学教育学部教育心理学科卒 (教育心理学専攻)、英国 York St John University 修士課程修了 (MA)。